

私のスキー史

7期 村田 泰恵

私の63年のスキー史をひも解いてみよう。

初めてスキーを履いたのは小学5年生の冬だった。単板で金具は長靴仕様のサンダル形式で、皮で作られ、後部に金具が付いていた。ストックは竹製で大きなリングが付いていた。そのころ福井県大野地方は豪雪地帯であり、1年に4・5回は屋根雪下ろしをしており、下した雪は1階部分を覆い、下屋まで達していた。庭には長さ20mほどの天然のスロープが出来ていた。真直ぐ滑ると築山にぶつかるので、嫌でも左右に曲がらなくてはいけなかった。そうやって曲がることを覚えていった。



(昭和29年 小学5年)

中学生になると合板のスキーが出回り始めた。金具もカンダハーとなり靴も長靴ではなくゴムのスキー靴になった。滑る場所も庭ではなく校庭に作られたスロープになった。学校ではウサギ狩り遠足なるものがあり、スキーを持っている者はスキー遠足となる。スキーを持っているのはクラスで二、三人くらいであったので、市内のスキー大会にも出るようになった。10校ほどの参加校のうち田舎の中学校はレベルが高く、町の中学校はスキーを持っている生徒の寄せ集めで、練習など一度もしたことがないまま競技会に参加させ

られた。私はリレー（距離）のアンカーを任されたが、バトンを受けたとき、他校のチームは全てゴールインしており、一人とぼとぼとコースを一周したことを覚えている。

高校になると体育の授業は、3学期はスキーとなり、体育館はスキーのロッカールームに様変わりした。当時積雪は2・3mあり、校庭と続きの今「天空の城」でライトを浴びている標高249mの亀山がゲレンデとなった。3代目のスキーは「ヤマハ」（当時のトップメーカー）のスキーであった。この頃になるとバスで「六呂師高原スキー場」に出かけるようになった。三角山の上から直滑降で滑り、最後は止まらず雪の中に顔面制動であった。スキー部の顧問に「スキー部に入らないか？」と声を掛けられ、ダメもとで親に言うと、思ったとおり即却下であった。



(昭和35年 高校2年 六呂師高原)

大学でワングルに入ると嬉しいことに冬は冬山登山の代わりにスキーとのことだった。1年生のスキー合宿は大糸線の「山之坊」。「平岩駅」から坂道を40分ほど登ったところに民宿があった。ゲレンデはそこから20分ほど登った斜面で300mあるかなしの小さなスキー場であった。リフトとしてロープが1本張られていた。正月明け3泊4日くらいの合宿だったと記憶している。1年生の初めてのスキー合宿、その年は年末から雪が降り始め大雪となり、我々が合宿から戻った

翌日には大雪のため北陸線は不通となってしまった。もし翌日の列車に乗っていたら2・3日列車に閉じ込められていたはずである。いわゆる三八豪雪で大学も休講続きで、校舎の屋根雪下ろしのため男子はスコップを持っての登校もあった。

当時金沢市内唯一のスキー場は野田山の段々畑であった。大雪のお陰で恰好のスロープが出来ていた。寺町1丁目終点で市電を降りて20分ほど歩くとゲレンデに到着した。我々1年生は4年生の高田先輩たちに連れられて何度か通った。

「山之坊」へは年末、正月明けの合宿と2度行くこともあったが所詮お遊びであった。



(昭和38年3月)

卒業後昭和46年2月に11期(青柳、畔山、片田、加藤、上村、小山、杉森、守内、森川、矢崎、橋本)が中心となり「野沢温泉」での初めてのスキーツアーがあった。12期(大出、近藤、宮島)、OB田村(3)、高島(3)、大橋博(5)、田丸(7)、村田(7)、藤井(8)、伊藤俊成(9)、吉田憲正(10)を含め22名が参加した。このツアーはもう一度行われたと思うが記録が残っていない。長坂ゲレンデは超満員で1本目のリフトに乗るため3時間待ちだった記憶がある。高田先輩に連れられて「馬の背コース」(多分スカイラインの下部)をこわごわ滑ったことも覚えている。



(昭和46年 野沢温泉スキーツアー)

昭和40年代はスキーブームの真っ只中であり、列車も超満員で入口から乗れず、金沢駅や白馬駅では何度か窓から乗り込んだこともあった。

本格的にスキーにのめり込んでいったのは大学卒業後昭和45年ころからだ。新赤倉を拠点に「梅池」、「白馬」、「岩岳」、「蔵王」、「志賀」、春には「立山」、夏には「乗鞍」と年間30日以上滑り、昭和48年には「新赤倉スキー場」でSAJ1級を取得、翌年には日赤石川県支部スキーパトロール員の資格も取得した。

この頃は1m90cmのスキーを履いていた。板も「HEAD」、「ROSSIGNOL」、「elan」、「ATOMIC」、「SALOMON」、「Kneissl」、「K2」、「FISHER」等々海外ものが花盛りであった。国産は「OGASAKA」、「KAZAMA」が健闘していた。



(昭和44年正月 八方尾根)

この間大きな災害にも出くわした。昭和46年12月31日薬学部の友枝研究室の面々7・8名と新赤倉温泉にスキーに行ったときのことである。私は皆より1日遅れで午後3時ころ宿の「西原山荘」に着き、ゲレンデを眺めながら食堂で一休みしていた。ゲレンデのすぐ横には白田切川が

流れていた。宿は川沿いに道路に面して建っていた。道路を挟んでゲレンデが広がっていた。ゲレンデを眺めていると見たことのない光景が轟音とともに目に飛び込んできた。川幅一杯に広がった土石流の先端であった。何が起きたかは分からなかったがスリッパのまま外にとびだしていた。私の前を子供を抱えた父親が走っていた。どちらに逃げればいいのか分からずしばらくスリッパで上着もない状態で土石流が川べりの木々をなぎ倒し、幅を広げて行くのを呆然と眺めていた。ゲレンデでは何も知らないスキーヤーがスキーを楽しんでいた。ゲレンデに放送が流れたのは10分ほどしてからであった。この寒空で着の身着のままでは困ると思い、土石流が宿の玄関に達していないの確認して、宿の3階まで駆け上がり、リュックと靴を取りに戻った。その後体制を整え、避難所に指定されたロッジへ仲間を探しに行ったが見つめることは出来なかった。差し当たり今夜の宿を確保しなければならぬと思い、被害の及ばない赤倉温泉へ走った。知り合いが「次井旅館」の常連と聞いていたので、そこに行き一夜の宿を確保した（大概一部屋くらいの予備は持っているものである）。その足でまた仲間を探しに新赤倉温泉に戻り、無事だった仲間を「次井旅館」に誘導した。ゲレンデ下の道路は封鎖され、「西原山荘」へは近寄ることも出来なかった。宿の人も皆無事で避難していた。しかし、川向うの家は土石流に押し流され、幼児1名が亡くなった。その家には母親と3人の幼子がおり、母親は二人しか抱えて逃げられず、残された一人が犠牲になるという痛ましい出来事であった。白田切川上流で発生した崩壊で流失した土石流は30万 m^3 であった。

この崩壊は、6年半後昭和53年5月18日午前6時20分更に大きな被害を与えて起こった。この時は、崩壊土砂は20万 m^3 と前回よりは少なかったが死者13名という大惨事となった。今度は「西原山荘」も難を逃れることが出来ず、半地下のベッドで寝ていた一人娘の「のんちゃん」の上を土石流が襲い帰らぬ人となってしまった。13歳でスキーヤーとして将来を囑望され、スポンサーも付いたばかりであった。彼女が小学生のころは子守を頼まれ一緒にゲレンデで滑ったものであった。以後数十年「新赤倉、赤倉」は遠い

スキー場となってしまった。



(昭和44年3月 赤倉)



(昭和45年3月 蔵王)



(昭和46年3月 梅池)

結婚後は、長女が3歳になると年末年始1週間はスキー場で過ごした。「黒姫スキー場」は5・6年利用した。ホテルとゲレンデが直結しており、誠に便利が良かった。子供たちがスキースクールに入れるようになると、今度はS I Aの検定に挑戦し、セミゴールドを取得、しかしゴールドの壁は厚く手が届かないうちに子供たちの受験が始まり、家族スキーは終わりを告げた。

6年間ほどスキーから遠ざかっていたが、再び、立山の春スキーから再開することになった。ツボ足で真砂岳の尾根まで直登し一気に滑り降りるのは爽快であった。カービングスキーが出回り始めたころであった。スキーを新調し、年に数回滑るようになった。

そうこうする内に「野沢温泉スキー合宿」が再開され、時々参加するようになった。



(平成12年 第3回野沢スキー合宿)



(平成21年 第12回野沢スキー合宿
24年度国展写真部 初入選作“冬の詩”)

18回が終わった後、スキーから足を洗うべきか否か考えるようになった。スキー板も日進月歩の勢いで変化しており、旧式のスキーではゲレンデに立ちにくくなっていた。

平成27年秋には80%スキーを止める方向に傾いていたが、11月の或る日、美容院の予約時間に20分ほど余裕があったので、スキーショップを覗いてみることになった。これが運のつきで、新しいスキー用具を見たら、「スキーを止めよう」と思っていたのが何所かに吹飛んで行ってしまった。スキー板、ストック、ゴーグル、ヘルメットを新調し、「19回野沢温泉スキー合宿」に参加することになっていた。

ここ5年はスキーよりも写真撮影に重点を置いていたが、今年はスキー一本で行くことにした結果、思ったより上手く滑ることが出来た。この原因の一つにゴルフで足腰が以前より鍛えられていたことが挙げられる。予期せぬゴルフ効果であった。

今年はまだ一つ嬉しいことがあった。数十年ぶりに「八方」で滑れたことである。青柳さんたちが「八方」で滑った話をするのをいつも羨ましく聞いていたが、自分の足前を考えると自分から参加させてとは言うことが出来なかった。今年初めてお誘いがかかり、長年の念願が叶い「八方」を滑ることが出来た。これも偏に保田さんはじめ同行の皆さんの助けがあったればこそ、である。

50年前11月新雪の中を小屋の人に心配されながら一人でリーゼンを転びながら滑り降りた？ことが懐かしく思い出された。また、来年も滑れるだろうか？

私のスキー史終了まであと何年あるか分からないが、これからも精一杯楽しく滑りたいものである。



(平成29年3月 八方尾根)